

研究ノート

## 『摩尼十万語』の基礎的研究 (1)

——第 2 部第 44 章の部分訳とテキストのローマナイズ——

Basic Research on the *Maṇi bka' 'bum* (1):

A Translation and Romanization of Selected Passages in Chapter 44 of Part 2

佐久間留理子

SAKUMA Ruriko

The *Maṇi bka' 'bum* is a collection of texts concerning Tibetan King Srong btsan sgam po (A.D. 581–649), in which the king is described as the incarnation of the Bodhisattva Avalokiteśvara. This collection is a part of the literature known as "hidden treasure" (*gter ma*), which is said to have been mysteriously discovered. In fact, the *Maṇi bka' 'bum* was compiled around the fifteenth century in Tibetan Buddhism. The entire *Maṇi bka' 'bum* collection is divided into three sections, namely the "Sūtra section," "Sādhana section" and "Sections of instructions." This study aims to present a translation and romanization of selected passages in Chapter 44 of Part 2, included in the "Sādhana section" describing visualization in Esoteric Buddhism.

キーワード: チベット仏教 (Tibetan Buddhism)、ソンツェン・ガンポ王 (King Srong btsan sgam po)、成就法 (Visualization)

## 1. はじめに

## (1) 研究の目的

チベットの建国王であるとともに、観自在<sup>1</sup>の化身として信仰されてきたソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po) (A.D. 581-649)<sup>2</sup>は、「埋蔵経典」(*gter ma*) と総称される典籍の一つである『摩尼十万語』(*Maṇi bka' 'bum*) を著したと伝えられる。また、それは 12 世紀から 13 世紀頃にかけて 3 人の経典発掘者 (*gter ston*) によって発見されたという伝承がある。しかし、実際には 15 世紀頃に、それまで主に口伝で伝承されてきた観自在信仰が現行の形としてまとめられたものと考えられている<sup>3</sup>。本稿では、インドで成立した観自在信仰が、チベット仏教においてどのように受容され、変容したのかという視点から『摩尼十万語』第 2 部第 44 章「大悲者の化身・護法王ソンツェンガンポによって著された大なる成就法」を取り上げる。そこには、四臂観自在 (六字観自在) を本尊とするマンダラ観想が説かれるが、その源泉は、インド後期密教の成就法集成である『サーダナ・マラー』(*Sādhanamālā*) 所説の六字観自在の成就法 (密教的観想法)<sup>4</sup>や 7 世紀初頃に西北インドで成立した『カーランダ・ヴューハ・スートラ』(*Kāraṇḍavyūha-sūtra*) 所説の「六字大明マンダラ」<sup>5</sup>にあると考えられる。今後これらのインド資料とチベット資料とを比較するための基礎的研究として、本稿において『摩尼十万語』第 2 部第 44 章の部分訳 (逐語訳) とテキストのローマナイズを行う<sup>6</sup>。また、当該箇所の説かれる内容と『サーダナ・マラー』所説の六字観自在の成就法との共通点と相違点についても若干の指摘を行う。

なお、原典テキストは、ブータンのプナカ版<sup>7</sup>を使用し、部分訳に際しては英訳<sup>8</sup>を参照した。先行研究では、槇

<sup>1</sup> チベット語では、*syān ras gziḡs dbang phyug* (観自在) と呼ばれる。日本では、「観音」、もしくは「観世音」とも言われるが、本稿ではチベット語に対応する「観自在」の語を用いる。

<sup>2</sup> (山口, 1988, p. Xiii).

<sup>3</sup> (山口, 1988, p. 784; Kapstein, 1992, pp. 79-93, 163-169; 石濱 2001, p. 23 注 26, p. 223 注 1; 槇殿, 2021, pp. 14-17).

<sup>4</sup> 下記の注 12 を参照。

<sup>5</sup> (Mallmann, 1948, p. 44; Vaidya, 1961, p. 296; 田中, 1990, p. 183; 佐久間, 2011, p. 139-140) .

<sup>6</sup> ローマナイズは、将来、本稿で使用したプナカ版の他に、ラサ版等も使用してテキスト校訂を行うための基礎的作業である。

<sup>7</sup> (Tranyang and Jamyang Samten, 1975).

<sup>8</sup> (Trizin Tsering Rinpoche, 2007).

殿 (2021, pp. 215-491) が、『摩尼十万語』第 1 部セクション I 第 1-36 章の和訳とテキスト校訂を公表する。しかし、本稿で取り上げる箇所<sup>9</sup>の和訳とテキスト校訂は、先行研究では公表されていない。従って、本研究によって新たな基礎的資料を提示することができる。

## (2) 研究の背景

本稿は、2022 年度科学研究費助成事業・基盤研究 (B) (一般)「チベットにおける観音信仰の受容と変容：『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」(課題番号 21H00476) (研究代表者 佐久間留理子) による研究成果の一部である。また、本稿は、本学開講科目の「宗教学」の授業においてチベットの宗教に関する資料として活用する予定である。

## 2. 「大悲者の化身・護法王ソツェン・ガンポによって著された大なる成就法」

### (1) 『摩尼十万語』における第 2 部第 44 章の位置とその内容構成

『摩尼十万語』の内容は、「経類 (mdo skor)」「成就 [法] 類 (sgrub skor)」「口伝類 (zhal gdams kyi skor)」の三つの部門に大別される<sup>9</sup>。本稿で取り上げる第 2 部第 44 章は、これらの中、「成就 [法] 類」に属する。また、第 2 部第 44 章の内容は、①マンダラ図絵の描き方、②マンダラの加持、③マンダラ観想から構成される。本稿では③の部分を取り上げる。なお、以下において [ ] 内に [482, 6] のように表記する数字は、原典テキストのページ数と行数である。以下に掲載する部分訳 (逐語訳) では、補った訳語を斜体で表記した。

### (2) 概要

仏教の瞑想法には、心的作用を鎮静化させるものと、心的作用を活性化させるものがある。前者には、インドの古典ヨーガや日本の禅のような実践方法がある一方、後者には、密教における成就法のような実践方法がある。成就法は、行者が現前に本尊の姿を観想してそれとの一体化をはかるものであり、心的作用を活性化させることによって悟りの境地を目指す実践方法である。

本稿で取り上げた成就法では、行者は本尊の四臂の観自在 (六字観自在) を観想し、最終的にそれと一体化する。最初に [1.1]「観想の核の設定等」において、観想の核となる種子 (視覚化された字音) を生起させ、その種子から光を放出し、その光によって本尊等を行者の現前に呼び寄せる。次に、[1.2]「礼拝・供養・懺悔等」において、行者は、文言を唱えて諸仏、諸菩薩を現前に引き寄せ、礼拝・供養・懺悔等を行う。これらの中、懺悔は心的な浄化に相当する。そして、[1.3]「四無量心等の修習 (瞑想)」において、行者は、文言を唱えて四無量心・捨 (心が平等であること)・空 (あらゆるものに実体がないこと) を修習し、自らの心的状態を鎮める。ここまでの段階では、行者は心的作用を鎮静化させる方法と心的作用を活性化させる方法との双方で実践を行う。

次に、[2.1]「観想の核から楼閣を観想すること」から本格的な観想を開始し、心的作用を大いに活性化させる。この段階では、行者は、本尊が存する「場」としての環境世界 (仏教用語では「器世間」) を観想する。即ち、虚空に本尊等を護るための守護輪を設定し、本尊が存するための楼閣を創出する。[2.2]「本尊の観想」では、行者は楼閣の中に四臂の観自在 (六字観自在) の姿を細部に至るまでありありと観想する。[2.3]「本尊を取り巻く脇侍の観想」では、本尊の前方に、観自在の精髓である六字真言 (オーム、マニパドメー、フーム) の女神化である六字の女神を、また、本尊の右に、マニダラ (宝石を持つもの) を、さらに、本尊の左に、ヴィディヤーダラ (持明者) を、さらにまた、本尊の背後に、阿弥陀仏を観想する。次に、これらの諸尊の外部に、毘盧遮那 (大日)、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就等の十二尊を観想する。さらに、[2.4]「門衛の観想」では、楼閣にある東西南北の四門に、各々インドラ (帝釈天) (東)、シャークヤムニ (釈迦牟尼) (南)、シャークヤシンハ (釈迦獅子) (西)、法王 (北) が位置し、楼閣を守護しているのを観想する。

次に、[2.5]「三摩耶薩埵と智薩埵の観想」では、行者は三摩耶薩埵と智薩埵とを現前に観想する。三摩耶薩埵は、この段階までに行者が観想において思い描いた仮の姿の本尊等であり、智薩埵は仏の世界から引き寄せられ

<sup>9</sup> (Kapstein, 1992; 楨殿, 2021, pp. 15-16)

た本質的な姿の本尊等である。なお、三摩耶薩埵と智薩埵は、いずれも姿や形のある仏の身体、即ち「色身」である。[2.6]「マンダラの諸尊等の供養」では、智薩埵としてのマンダラの諸尊等を供養する。そして、[2.7]「三摩耶薩埵と智薩埵との一体化」では、三摩耶薩埵としての行者自身が智薩埵と一体になる。[2.8]「灌頂と加持」では、既に前段階で智薩埵と一体化した行者が、密教五仏に対して自らに灌頂と加持を与えることによって、仏の世界に参入することを願う。この段階において、行者は、本尊との完全な一体化、即ち最終的な悟りの境地に到達すると考えられる。この後、[2.9]「観自在とその脇侍、五仏、六波羅蜜の女神、六道の大聖者への称讃」では、成就法の最後が密教五仏等の称讃によって飾られる。

[2.10]「成就」では、この成就法を実践することによって得られる果報、例えば、仏教的真理の獲得等が説かれる。[3]「成就法を終結させること」では、行者がマンダラ図絵の砂を集めて川に捨て、成就法を終わらせることが説かれる。

### (3) 部分訳とテキストのローマナイズ

#### [1] 準備段階の観想

##### [1.1] 観想の核の設定等

それより、行者は自らの心臓にある「パム」の種子から蓮華を、「ア」の字音から月輪(円盤状の月)を観想する。その上のその白い「フリーヒ」の字音から光線を広げることによって、師と大悲の神々と諸仏と菩薩の集まりが行者の現前の虚空に到来する。蓮華と月輪の座にお座りいただくようにと行者によって願われる。

([482, 6] de nas rang gi snying khar pam las padma a las zla ba'i steng du hrīḥ dkar po de las 'od zer 'phros pas/ bla ma dang thugs rje chen po'i lha tshogs [483, 1] sang rgyas dang byang chub sems dpa' rnam mdun gyi nam mkha' la byon nas pad zla'i gdan la bzhugs su gsol bar bya ste/)

##### [1.2] 礼拝・供養・懺悔等

「三世に住する一切の師と大悲者(観自在)のマンダラの神々の集まりと、仏の子を有する十方の諸仏と菩薩よ、輪廻世界の生類の苦しみを取り除くために、彼らが自らの住処より引き寄せられ、いらっしやるようにお願いします。どうぞ日輪(円盤状の太陽)と月輪と蓮華の座にお座りください。身(身体活動)、口(言語活動)、意(心的活動)によって、献身的に礼拝します。現実の供物と心によって作り出された最上の供物を受け取ってください。前世から現在まで私たちがなした悪い行いを一つ一つ懺悔します。凡夫、声聞、縁覚、菩薩によってなされた善根に随喜します。三世(過去、現在、未来)の仏の口から説かれた法輪を、生類のために転ずることを願います。生類の利益をなせずに涅槃に入ることを望まず、生類の利益のために輪廻世界に留まることを請願します。自他によってなされた善根によって、生類は最上の完全な悟りを得ますように」と唱える。

(dus gsum bzhugs pa'i bla ma thams cad dang// thugs rje chen po'i dkyil 'khor lha tshogs dang// phyogs bcu'i sangs rgyas byang sems sras dang bcas// sems can 'khor ba'i sngal bsal ba'i phyir// rang bzhin gnas nas spyen 'dren gshegs su gsol// nyi zla padma'i gdan la brtan par bzhugs// lus ngag yid gsum gus pas phyag 'tshal lo// dngos 'byor yid sprul mchod pa dam pa bzhes// skye bo nyan thos rang rgyal byang chub sems// dus gsum dge rtsa bgyis la rjes yi dang// dus gsum dangs rgyas zhal nas gsung ba yi// chos 'khor sems can rnam la bskor du gsol// 'gro don mi mdzad mya ngan 'da' bzhed la// 'gro ba'i don du bzhugs par gsol ba 'debs// bdag gzhan dge pa'i rtse ba gang bsags pas// bla med rdzogs pa'i byang chub thob par shog// ces brjod la//)

##### [1.3] 四無量心等の修習(瞑想)

「次に、四無量心を修習します。三界と六道の苦しんでいる一切の生類を私は憐れみます。生類は苦しみから自由となりますように。幸福に遭遇しますように。食欲、怒りから自由になり平等に住しますように」と唱える。平等な「捨」が修習されるべきである。次に、知恵の資糧を集めることに関して、次のように唱える。「オーム、一切の法は自性清浄である。私は自性清浄である」と唱えることによって、内と外の一切の法(存在)が「空」そのものとなる。

(de nas tshad me pa bzhi bsgom ste/ khams gsum 'gro drug gi sems can sdug bsngal pa thams cad snying re rje/ sdug sngal dang bral bar bya/ bde ba dang phrad par bya/ chags sdang dang bral ba'i btang snyoms la gnas [484, 1] bar bya'o snyam pa'i btang snyoms sgom par bya'o// de nas yes shes kyi tshogs bsag pa ni/ om swa bha wa shu ddhāḥ sarba dha rmāḥ sva bhāwa śuddho 'haṃ/ zhes pas phyi nang gi chos thams cad stong pa nyid du gyur/)

## [2] 本格的な観想

### [2.1] 観想の核から楼閣を観想すること

次に、虚空の中央に守護輪を修習する。「空」の本質より、「ラム」の種子を観想し、それより、月輪の上に「フム」の種子を観想し、それが、「フム」に印づけられた一つの十字金剛になる。それより光を拡散することによって、下方は金剛の大地、上方は金剛の天蓋となる。側面は金剛の壁、一切の外側は金剛の柵（囲い）となるのを思念する。次に、楼閣が生起されるべきである。守護輪の金剛の柵の天蓋の内部に、一つの黄色い「ブム」を思念する。それより、光を拡散することによって、光が勝者（仏陀）の国土の全てに満ちる。光によって楼閣の本質を集める。こちらに集まったもの（光）から、上方に法輪の千の輻、下方に千の花弁を有する楼閣を観想する。楼閣の中央に、四つの花弁の蓮華と、その外部に十二の蓮華の花弁を、四角形の中庭と四門を、五種の宝石の壁、ダルカ柱に垂れ下がった宝石のペンダント、瓔珞と半瓔珞等を観想する。四門にある四層のトーラナ（半円形の門の装飾）の上に、法輪と傘と鹿等の多くの装飾が作られている。内外が全てともに輝いているのを修習する。

(de nas nam mkha' stong pa'i dbus su bsrung ba'i 'khor lo sgom ste/ stong pa'i ngang las ram las nyi ma'i steng du hum las rdo rje rgya gram hum gis mtshan pa cig tu gyur/ de las 'od 'phros pas 'og rdo rje'i sa gzhi/ steng rdo rje'i gur/ logs rdo rje'i rtsig pa/ phyi rol thams cad rdo rje'i ra bar gyur par bsam/ de nas gzhal yas khang bskyed par bya ste/ bsung 'khor rdo rje'i ra ba'i gur gyi nang du/ bhum ser po cig bsam/ de las 'od 'phros pas bde bar gshegs pa'i zhing khams thams cad du khyab nas/ 'od zer gyis gzhal med khang gi bcud bsdu/ tshur 'dus pa las gzhal yas khang steng 'khor lo rtsibs stong/ 'og padma 'dab ma stong dang ldan zhing dbus su padma 'dab ma bzhi dang/ dbus su padma 'dab ma bzhi dang/ de'i phyi rim la padma 'dab ma bcu gnyis pa/ gru chad (sic.)<sup>10</sup> dang bar khyam se dang sgro bzhi ldan pa/ rin po che sna snga'i rtsig pa byas pa/ rta'i pha gu dang/ dra ba dra phyed dang da ru ka la sogs pa 'phreng ba/ sgo bzhi la rta babs rin pa bzhi'i steng na chos kyi 'khor lo dang/ gdugs dang ri dags la sogs pa'i rgyan du mas mdzes shing phyi nang kun tu gsal bar gyur pa cig sgom/)

### [2.2] 本尊の観想

次に、楼閣の中にある本尊が座る座を生起することは以下の通りである。その楼閣の中の中央の蓮華の四つの花弁と外部の十二の蓮華の花弁の上に、「パム」の種子を観想し、それより八葉（八つの花弁）の二重蓮華（上下に花弁をつけた蓮華）を、その上に、「ア」の種子を観想し、それより月輪を、中庭と四門には、たった一つの本尊のための座を思念する。次に、神（本尊）を生起することについては、以下の通りである。「オーム、マニパドメー（宝珠と蓮華よ）、フーム」（六字真言）<sup>11</sup>と唱えることによって、中央に「フリーヒ」の種子を観想し、それより光を拡散して二つの利益をなす。光がここに集まり、「フリーヒ」の種子に溶ける。さらに、種子が光に溶解入り、白い蓮華となる。次に、光が到来し拡散して、ここに集まったものから、大悲者である聖なる観自在を観想する。それは一面四臂であり、身体は白色で、水晶のごとくに輝き、第一の二臂は胸前で合掌する。下方の左の臂は、水晶の数珠を持ち、下方の右の臂は、白い蓮華を持つ<sup>12</sup>。本尊は蓮

<sup>10</sup> chod が正しい綴りである (Das, 1983, p. 246)。

<sup>11</sup> 六字真言は、敦煌出土の 10 世紀頃のチベット語文書にも知られるが (Imaeda, 1979)、チベット仏教文献に集中的に説かれるようになるのは 12 世紀以降であるとされる (Schaik, 2006, p. 67)。『摩尼十万語』には、観自在と六字真言の功德が大いに宣伝されている (Ehrhard, 2013; 榎殿 2021)。なお、六字真言の語義については、(佐久間, 2011, pp. 182-183, 注 2) を参照。

<sup>12</sup> 本文に説かれるような四臂の観自在の図像は、バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所説の六字観自在の成就法 (nos. 6, 7, 11) (Bhattacharyya, 1968a, pp. 26-30, 34; Sakuma, 2002, pp. 65-78; 佐久間, 2011, pp. 138, 140, 341, 349-350, 357) に説かれる。

華と月輪の座に、金剛跏趺坐（結跏趺坐の別名）で坐す。顔は微笑む表情であり、寂靜な目によって、六道の生類を慈悲の心で見ると見る。宝石の冠、耳飾り、首飾り、肩の飾り、飾り帯、腕輪、足輪、喉の飾り、瓔珞、半瓔珞等、宝石の飾り、様々な絹に飾られた、蓮華の印と美しさを有する一人の本尊を生起するのである。

(de nas gdan bskyed pa ni/ [486, 1] de'i nang du dbus kyi pad 'dab bzhi dang/ phyi rim pad 'dab bcu gnyis kyi steng du pam las sna tshogs padma 'dab ma brgyad pa/ de'i steng du a las zla ba'i dkyil 'khor/ bar khyams dang sgo bzhi padma rkyang ba'i gdan bsam mo// de nas lha skyed pa ni/ om ma ni padme hūm/ zhes brjod pas/ dbus su hrīḥ las 'od zer 'phros don gnyis byas/ tshsur 'dus hrīḥ la thim 'od du zhu ba las padma dkar por gyur/ de las 'ong 'phros tshur 'dus pa las thugs rje chen po 'phags pa spyen ras gzigs dbang phyug zhal gcig phyag bzhi pa/ sku mdog dkar po shel ltar 'tsher ba/ phyag dang po gnyis <sup>(3)</sup> thugs khar <sup>(3)</sup> thal mo sbyor ba/ g'yas 'og ma shel phreng dang g'yon 'og ma na padma dkar po dzin pa/ pad zla'i gdan la zhab rdo rje'i skyil krungs su bzhus pa/ zhal 'dzum pa'i mdangs dang ldan zhing/ spyen zhi ba'i nyams dang ldan pas 'gro drug la thugs rjes gzigs pa/ rin po che'i dbu rgyan/ snyan rgyan/ mgul rgyan/ dpung rgyan/ ske rags/ phyag gdub/ zhab gdub/ mgur cha/ do shal/ se mo do la sogs pa rin po che'i rgyan dang dar sna tshogs kyi spras pad mtshan dang dpe byad du ldan pa zhig bskyed do//)

### [2.3] 本尊を取り巻く脇侍の観想

次に、脇侍を生起することは以下の通りである。その本尊の前方に、「フリーヒ」の種子を観想し、それより六字の女神<sup>14</sup>、即ち、身体と手の特徴、装飾、衣装の一切は主（本尊）と同様であり、父（男神である本尊）にお辞儀をするようにして座す一人の尊格を生起するのである。右の蓮華の上には、息子であるマニダラ（宝石を持つもの）<sup>15</sup>、即ち、身体が白色で一面二臂であり、右手で宝石を、左手で数珠の輪を持ち、主（本尊）にお辞儀をするようにして座す一人の尊格を生起するのである。左の蓮華の上には、娘であるヴィディヤダラ（持明者）、即ち、身体は白色で、一面四臂であり、右手で水晶の輪を持ち、左手で蓮華を持ち、主（本尊）にお辞儀をするようにして座す一人の尊格を生起するのである。背後の蓮華には阿弥陀仏、即ち、赤色であり、二臂で定印を結び、左右対称の等しい脚勢で座す一人の尊格を生起するのである。その外部の十二の花弁の蓮華の上に、順番に存する、白色で輪を持つ毘盧遮那仏、青色で金剛を持つ阿闍梨、黄色で宝石を持つ宝生仏、赤色で蓮華を持つ阿弥陀仏、緑色で十字金剛を持つ不空成就仏、白色で蓮華を持つ大悲者（観自在）、仏眼女、マーマキー、サマンタパドリ（普賢母）、パドマヴァーシニー（白衣母）、ターラー、般若波羅蜜女神らは、身体の色、手の特徴、装飾、衣装等が、自らの父（配偶者としての男神、仏）と同様である。

(de nas 'khor bskyed pa ni/ de'i mdun du hrīḥ las lha mo yi ge drug ma sku mdog dang phyag mtshan rgyan cha lugs thams cad gtso bo dang 'dra ba/ yab la 'dud pa'i 'tshul du [486, 1] bzhus pa cig bskyed do// g'yas kyi padma'i steng du sras nor bu 'dzin pa sku mdog dkar po zhal gcig phyag gnyis pa g'yas na rin po che dang/ g'yon na phreng ba 'dzin pa gtsho bo la 'dud pa'i 'tshul du bzhus pa cig bskyed/ g'yon gyi padma'i steng du sras mo rig sngags 'dzin ma sku mdog dkar mo zhal gcig phyag gnyis ma/ g'yas shel phreng dang g'yon padma 'dzin pa gtso bo la 'dud pa cig bskyed do// rgyab kyi padma las sangs rgyas snang ba mtha' yas sku mdog dmar po phyag gnyis ting ge 'dzin gyi phyag rgyas mnyam pa'i

例えば、バツチャルヤ校訂本 (no. 6) 「聖なるシャダクシャリー・マハーヴィドヤ（聖六字大明）成就法」には、次のように、本尊の姿が説かれる。「一切の飾りに莊嚴され、白色であり、四臂を具え、左手に蓮華を持ち、右手に数珠を持ち、他の二つの手が胸の前で虚心合掌する世自在（観自在）の姿をもつものを自分自身であると瞑想すべきである」(Bhattacharyya, 1968b, p. 125; 佐久間, 2011, p. 341)。

<sup>13</sup> thugs kar が正しい綴りである (Das, 1983, p. 578)。以下同。

<sup>14</sup> 六字真言の女神化である「六字大明」(Ṣaḍakṣarī-mahāvidyā) を意味すると考えられる。六字大明は、『サーダナ・マラー』所説の六字観自在成就法 (佐久間, 2011, pp. 140, 341) 及び『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』に説かれる (上記の注 5 を参照)。

<sup>15</sup> マニダラは、『サーダナ・マラー』所説の六字観自在成就法 (佐久間, 2011, pp. 140, 341)、及び『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』に説かれる (上記の注 5 を参照)。

skyil krungs su bzhugs pa cig bskyed do// de'i phyi rim padma 'dab ma bcu gnyis kyi steng du rim pa bzhin rnam par snang mdzad dkar po 'khor lo bsnams pa/ mi bskyod pa sngon po rdo rje bsnams pa/ rin chen 'byung ldan ser po rin po che bsnams pa/ snang ba mtha' yas dmar po padma bsnams pa/ don yod grub ljang khu rdo rje rgya gram bsnams pa/ thug rje chen po dkar pa padma bsnams pa/ sang rgyas spyang dang/ ma ma ki/ kun tu bzang mo dang/ gos dkar mo dang/ sgröl ma dang/ shes rab kyi pa rol tu phyin ma rnam na sku mdog phyag mtshan rgyan cha lugs la sogs pa rang rang gi yab dang mthun pa'o//)

#### [2.4] 門衛の観想

四門の中、東門には、ヴィーナー（弦楽器）を持つ白色のインドラ（帝釈天）が存する。南門には、托鉢者の杖を持つ黄色いシャーケヤムニ（釈迦牟尼）が存する。西門には、経典を持つシャーケヤシンハ（釈迦獅子）が存する。北門には、火と水を持つ黒色の法王が存する。中庭には、三世の千二の諸仏が菩薩のように座しているのを修習するのである。

(sgo bzhi la shar sgor brya byin dkar po phyag na pi wang 'dzin pa/ thag bzangs ris sngon po go cha 'dzin pa/ lho sgor shākya thub pa ser po gseg shang (sic.)<sup>16</sup> 'dzin pa/ nub [487, 1] sgor shākya seng ge nag po po ti 'dzin pa/ nam mkha' mdzod dmar po sgröm bu byang sgor chos rgyal nag po me chu 'dzin pa'o// khyams la dus gsum gyi sangs rgyas stong rtsa gnyis byang chub sems dpa' tshul du bzhugs par sgom mo//)

#### [2.5] 三摩耶薩埵と智薩埵<sup>17</sup>の観想

これらの観想したものは、三摩耶薩埵を生起したものである。今、智薩埵が三摩耶薩埵に入ることは、次の通りである。主（本尊）の心臓にある蓮華の中心に月輪を観想する。その中央に、「フリーヒ」が住する。それより白い光が本尊の自らの住処に拡散することによって、脇侍をともなった大悲者（観自在）が行者の方へ引き寄せられる。「本来の共に存する最高の住処より、法身が不生の世界より動かなくとも、色身が生類の前に姿を化現させる。慈悲の力によって、この場所にいらっしゃるようお願いをする」。「オーム、マニパドメー、フーム。エーヤイヒ、ジャハ、フーム、バム、ホーホ」と唱えることによって、大悲者の神々が法身から色身の姿をとって到来するのを思念するのである。次に、お座りいただくようお願いする。「眷属をともなった大悲者が、一切の生類の利益をなすために、私に慈悲心をともなって近づくのを瞑想する。慈悲の力によって、お座りいただいて加持してください」。「オーム、マニパドメー、フーム、サマヤティスタ、ラン」と唱える。次に、礼拝は次の通りである。「法身に二元性<sup>18</sup>は無い。生類の利益をなす受用身として示される。慈悲によって、変化身で生類の利益をなす。三身（法身、受用身、変化身）である知恵の神（智薩埵）を礼拝し、称赞する」。「オーム、マニパドメー、フーム。アートマナム、ニルヤータヤーミ」と唱えて思念する。現前の虚空に留まる智薩埵に対して、私は三摩耶薩埵として礼拝する。次に、智薩埵である神（本尊）が私（行者）にお辞儀をするのを思念する。

(de nam ni dam tshig pa bskyed pa'o// da ni yes shes sems dpa' gzhug pa ni/ gtse bo'i thugs khar (sic.) padma'i dkyil du zla ba'i dkyil 'khor/ de'i dbus su hrīḥ gnas pa las 'od dkar po rang bzhin gyi gnas su 'phros pas/ thugs rje chen po 'khor dang bcas pa spyang drang pa ni/ rang bzhin lhan gyis grub pa'i gnas mchog nas/ chos sku skye med dbyings las ma g'yos kyang// gzugs sku 'gro ba'i ngon du skur sprul pa// thugs rje'i dbang gis gnas 'dir gshegs su gsol// om ma ni padme hūm/ eh yai hi/ dzaḥ hūm baḥ hoḥ zhes pas/ thugs rje chen po'i lha tshogs rnam chos kyi sku las gzugs kyi skur bzheng nas byon par bsam mo// de nas bzhugs su gsol ba ni/ thugs rje chen po 'khor dang bcas pa rnam// 'gro ba ma lus sems can don mdzad phyr// bdag la thugs rjes nye bar dgongs mdzed la/ thugs dam dbang gis bzhugs la byin gyis rlob/ om ma

<sup>16</sup> bshang が正しい綴りであると考えられる。gseg bshang は「托鉢者の杖」を意味する (Das, 1983, p. 1308)。

<sup>17</sup> 三摩耶薩埵と智薩埵は、インド中期密教を代表する経典の一つ『初会金剛頂経』にも説かれる (トゥッチ, 1984, p. 170, 注 17) (ロルフ・ギーブルによる訳注) (堀内, 1983, p. 147)。三摩耶薩埵と智薩埵に関する先行研究には、(トゥッチ, 1984; 肥塚, 1967; 清水, 1977; 奥山, 1989; 佐久間, 1993; 森, 2000; 立川, 2004) 等がある。

<sup>18</sup> 見るものと見られるものといった主観と客観の区別を指しているものと思われる。

ñi padme hūṃ/ sa ma ya ti ṣṭa lan/ de nas phyag 'tshal ba ni/ chos kyi sku la gnyis 'dzin mi mnga' yang// 'gro ba'i don mdzad longs spyod rdzogs skur [488, 1] bstan// thugs rjes cir yang sprul skus 'gro don mdzad// sku gsum ye shes lha la phyag 'tshal bstod// om ma ñi padme hūṃ/ atma nam nirma ta ya mi/ zhes bsam dun gyi nam mkha' la ye shes sems dpa' bzhugs pa la/ bdag nga dam tshig sem dpas phyag btsal bas/ de nas lha ye shes sems dpas bdag la 'tshal bar bsam mo//)

## [2.6] マンダラの諸尊等の供養

次に、供物を捧げる。たとえ脇侍をともなった大悲者（観自在）には、困難や飢えや渴きや苦痛が無くとも、大悲者自らが福德の集積を受け取り、供物の集まりによって喜び、受け取るようにお願いをする。「オーム、マニパドメー、フーム。サルヴァブージャ、メーガ、ハム」と唱えて、本尊に報いることを行う。即ち洗足水、花、線香、灯明、香、食物、音等の様々な外の供養を受け取るようにお願いをする。「アルガム、パードヤム、プシュペー、ドゥーペー、ディーパム、ガンデー、ナイヴェーディヤ、シャブダ、サルヴァブージャメーガ、フーム」と唱える。形、音、匂い、味、触（皮膚感覚）、法等を、吉祥な女神たちが虚空に満たす。マンダラの神々の集まりを喜ばせるために、供物を捧げる。彼らが喜んで受け取った後、彼らに加持を請願する。「ヴァジュララスヤ、ヴァジュラシャブダ、ヴァジュラドゥーペー、ヴァジュラナイヴェーディヤ、ヴァジュラパンチャリカ、ヴァジュラダルマ、サルヴァブージャ、サマヤマンダラ、ア、ラ、ラ、ホー」と唱えて、外の供物を捧げる。内の供物と女神の供物の二つは、三摩耶薩埵としての自分（行者）が智薩埵の神に供養するのである。そのように、身、口、意によって喜ぶ供物を捧げた後、次に、女神たちをここに集め、自らに幸福と「空」の状態を生起させ、女神たちが自ら（行者）を供養することを思念するのである。(de nas pū dza dbul te/ thugs rje chen po 'khor dang bcas pa la// nyon mongs bkres skom gdung ba mi mnga' yang// bdag cag bsod nams ye shes tshogs bsag phyir/ pū dzā'i tshogs kyi mnyes shing bzhes su gsol// om ma ñi padme hūṃ/ sarba pū dza me gha haṃ/ mchod yon zhabs bsil me tog bdug pa dang// snang gsal dri mchog bza' ba dang sgra snyan sogs// phyi yi mchod pa sna tshogs bzhes su gsol// arghaṃ/ pādyaṃ/ puṣṭe/ dhū pe/ dhi paṃ/ gan dhe/ naowe dya/ śabda/ sarba pū dza me gha hūṃ/ gzugs sgra dri ro reg bya chos la sogs// bkra shis lha mos nam mkha' kham pa gang nas// dkyil 'khor lha tshogs mnyes phyir mchod pa 'bul// dges shing bzhes nas byin gyis brlabs tu gsol// bdzra la sya/ bdzra shabda/ bdzra dhū pe/ bdzra nai wi dya// bdzra panyca li ka/ bdzra dharma/ sarba pū dza sa ma yam maṇḍala a la la ho/ zhes pas phyir rdzas kyi mchod pa dang/ nang lha mo'i mchod pa gnyis bdag dam tshig sems dpas lha ye shes sems dpa' mchod do// de ltar sku gsung [289, 1] thugs mnyes pa'i mchod pa phul nas/ de nas lha mo rnams tshur 'dus pa las rang la bde stong skyes pas rang mchod bar bsam mo//)

## [2.7] 三摩耶薩埵と智薩埵との一体化

次に、三摩耶薩埵と智薩埵との一体化という不二の状態に入ることは次の通りである。知恵の身体（智薩埵）には、二元性は無いけれども、三摩耶薩埵と智薩埵という二つの現れはある。不二の状態に確実に入った後、生類の利益の働きを円満にすることを願う。「オーム、マニパドメー、フーム。サマヤティクシャ、ラン」と唱えて、智薩埵の神と三摩耶薩埵としての自分自身（行者）とが一つとなり不二の状態に入る。成就が得られない間は、安定した状態に留まることを思念するのである。

(de nas gnyis su med par bstim pa ni/ ye shes skul gnyis 'dzi mi mda' yang/ gnyis snang ye shes dam tshig sems dpa' gnyis// gnyis su med par brtan par bzugs nas kyang/ 'gro don 'phrin las rdzogs par mdzad du gsol// om ma ñi padme hūṃ/ sa ma ya ti kṣa lhan/ zhes lha ye shes sems dpa' dang/ bdag dam tshig sems dpa' gnyis su med par bstims nas/ dngos grub ma thob kyi bar du brtan par bzhugs par bsam mo//)

## [2.8] 灌頂<sup>19</sup>と加持<sup>20</sup>

次に、灌頂を請願することが次のようになされる。密教の五仏が五つの 仏身と五智の身体に入り、五部族の

<sup>19</sup> 「灌頂とは秘儀を伝授され得る資格を認める儀礼」である（立川, 2015, p. 552）。

<sup>20</sup> 『加持』とは、一般的に、聖性の位階のより上のものから下のものへ『聖なる』力を付与することをいう（立川, 2015, p. 186）。本文の場合、五部族の勝者（仏）が行者に加持を与え、仏の力を付与する。

勝者(仏)<sup>21</sup>が、色究竟天より立ち上がる。五部族の主が、行者に灌頂と加持を与える。五部族の成就と五智を与える。「オーム、フーム、ソーハ、アーム、ハー、アビシンチャ、アハ」と唱え、神々の供物が、加持の印として五部族によって荘嚴されているのを思念する。次に、身、口、意の加持は次の通りである。三世の一切の諸仏について、私たちの身、口、意から離れることはないように、身、口、意を加持する。加持が灌頂を刻印しますように。「カーヤシッディ、オーム。ヴァークシッディ、アーハ。チッタシッディ、フーム」と唱えることによって、頭頂に「オーム」、喉に「アーハ」、心臓に「フーム」を布置する。それから、行者の身、口、意が金剛身、金剛口、金剛意となるのを思念するのである。

(de nas dbang skur bar gsol ba btap pa ni/ sku lnga ye shes lnga yi skur bzhugs nas/ rgyal ba rigs lnga 'og min gnas nas bzhengs// rigs kyi bdag pos dbang bskur byin gyis rlobs// rigs lngas ye shes lnga yi dngos grub stsol// om hūm soha āṃ hā a bhī śinyltsa a/ ces lha rnam kyi dbul dbang rtags su rigs lngas brgyan par bsam/ de nas sku gsung thugs byin gyis brlab pa ni/ dus gsum sangs rgyas thams cad kyi// sku gsung thugs dang dbyer med phyir// sku gsung thugs su byin brlabs nas/ byin rlabs dbang bskur rgyas gdab bo// ka yā siddhi om/ wakka siddhi āḥ/ citta siddhi hūm/ zhes pas spyi bor om/ mgrin par āḥ thugs khar hūm/ de las sku rdo rje/ gsung [490, 1] rdo rje/ thugs rdo rjer gyur par bsam mo//)

### [2.9] 観自在とその脇侍、五仏、六波羅蜜の女神、六道の大聖者への称讃

次に、称讃がなされることは次の通りである。「フリーヒ」という種子、知恵の神の中の神である大悲者、般若波羅蜜の母である六字の女神、優れた息子であるマニダラ(宝珠を持つ者)は、方便の様態である。ヴィディヤーダラー(持明者女)は、知恵(般若)の娘の様態である。永遠に終わることのない、行者自らと不二なる神、知恵の四人の神(大悲者、六字女神、マニダラ、ヴィディヤーダラー)に礼拝し、それらを称讃する。大悲者の目によって、生類が見られる。法界体性智を表す毘盧遮那、金剛の大円鏡智を表す阿閼、平等性智を表す宝生、妙観察智を表す阿弥陀、成所作智を表す不空成就の、五つの仏身、五智に礼拝し、それらを称讃する。法身であり法界の本質を表す般若波羅蜜、禪定波羅蜜を表す仏眼仏母、精進波羅蜜を表す普賢母、布施波羅蜜を表す白衣母、持戒波羅蜜を表すマーマキー、忍辱波羅蜜を表すサマヤ・ターラーという六波羅蜜の母(女神)の身体を称讃する。三世に住する千二の諸仏が、生類のために菩提心を起こして、菩薩の様態で生類を集める。賢劫の千の菩薩に礼拝し、それらを称讃する。神の大聖者であるインドラ(帝釈天)は、神々を従順にする。聖者である阿修羅のアヴィララは、阿修羅を従順にする。大聖者のガガナガンジャ(虚空庫)菩薩の母は、プレータ(餓鬼)を従順にする。聖者である法王は、地獄を従順にする。彼らは六道の各々の言葉で法の声を上げる。それぞれの苦しみを取り除きなさり、誕生の門を閉ざす<sup>22</sup>。六道の大聖者に礼拝し、それらを称讃する。

(de nas bstod pa bya pa ni/ hrīḥ thugs rdo rje chen po ye shes lha yi lha// yi ge drug ma shes rab dbyings kyi yum// nor bu 'dzin pa sras mchog thabs kyi tshul// rig sngags 'dzin ma shes rab sras mo'i 'tshul// ye nas ma bsgrubs rang gnyis med lha// ye shes lha bzhi'i skul phyag 'tsal bstod// thugs rje chen po'i spyin gyis 'grol gzigs// rnam par snang mdzad chos dbyings ye shes dang// mi bskyod rdo rje me long ye shes dang// rin chen 'byung ldan mnyam nyid ye shes dang// snang ba mtha' yas sor rtog ye shes dang// don yod grub pa bya grub ye shes te// sku lnga ye shes lnga phyag 'tsal bstod// shes rab pha rol phyin ma chos sku dbyings kyi ngang// sangs rgyas sbyin ma bsam gtan pha rol phyin// kun tu bzang mo brtson 'grus pha rol phyin// na bza' dkar mo sbyin pa'i pha rol phyin// mā ma ki ni tshul khriṃs pha rol phyin// dam tshig sgrol ma bzod ba'i pha rol phyin// pha rol phyin drug yum gyi sku la bstod/ dus gsum bzhugs pa'i sangs rgyas stod dang gnyis// 'gro ba'i don du byang chub thugs bskyed nas// byang chub sems dpa'i tshul gyis 'gro ba 'du la// bskal bzang sems dpa' stod la phyag 'tshal bstod// lha yi thub chen brgya byin lha rnam 'dul// lha min thub pa thags bzangs lha min 'dul// mi yi thub pa chen po [491, 1] mi rnam 'dal// shākya seng ge thub pas dud 'gro 'dul// thub chen nam mkha' mdzod kyi ma yi dags 'dul// thub pa chos kyi rgyal pos dmyal ba 'dul// 'gro drug so so'i skad du chos sgra...sgrogs// so so'i sdug bsngal sel mdzad skye sgo bcod// thub pa chen po drug la phyag 'tshal bstod//)

### [2.10] 成就(成就法から得られる果報)

次に、行者が成就を受け取ることは次の通りである。父母、息子を有する大悲者、五如来(五仏)、六波羅蜜

<sup>21</sup> 本文において後述する、毘盧遮那、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就の五仏を指す。

<sup>22</sup> 「誕生の門を閉ざす」とは、再生、輪廻しないようにすることを意味すると思われる。

の母(女神)<sup>23</sup>、十方の菩薩が三昧を実践する。変化身(応身<sup>おうじん</sup>)の聖者(観自在)が、六道の生類を方便によって従順にする。生類を従順にするために、慈悲によって身体を移動させる。行者は聖者の印のある成就を授けて頂くように請願する。最上と通常の成就を授けて頂くように請願する。「オーム、マニパドメー、フーム。カーヤ、ヴァーク、チッタ、シッダ、フーム」と唱えて、知恵の神々の、不変で自生である身体の成就、不変で障害の無い本質の教えの成就、不変で戯論<sup>けろん</sup>を離れた自らを照らす法の本質の成就を行者自らが獲得することを修習するのである。次に、唱えられるのは次の通りである。「オーム、マニパドメー、フーム」と、自らのマンダラの神々の集まりが一斉に唱える。自らの心臓のフリーという種子において、…(欠落箇所) …六字の女神によって取り囲まれたもの、それより光を拡散して、十方の一切の如来における身、口、意を喜ばせる供物を捧げる。三界の一切の生類に触れることによって、身、口、意の罪を洗い流し、三千世界の一切の世界が、大悲者の神々の集まりとなるのを修習する。このように、成就が得られない間は、三昧によって瞑想し、真言を唱えるべきである。

(de nas dngos grub blang ba ni/ thugs rje chen po yab yum sras dang bcas// bde gshegs rigs lnga pha rol phyin drug yum// phyogs bcu'i byang chub sems dpa' ting 'dzin sbyong// sprul sku thub drug 'gro drug thabs kyis 'dul// 'gro ba 'dul phyir thugs rjes sku skyod la// grub pa rtags kyi dngos grub stsal (sic.)<sup>24</sup> ru gsol// mchog dang thun mong dngos grub stsal du gsol// om ma ni padme hūm/ kā ya wa kka tsi tta siddha hūm/ zhes pa zlas pas ye shes kyi lha rnam kyi sku mi 'gyur ba lhun gyis grub pa'i dngos grub/ gsung mi 'gyur ba 'gag med snyid po lung gi dngos grub/ thugs mi 'gyur ba spro bral chos nyid rang gsal gyi dngos grub thob pa sgom mo// de nas bzlas pa bya ba ni/ om ma ni padme hūm/ zhes bdag dang dkyil 'khor gyi lha tshogs rnam kyis dus gcig tu bzlas pa/ rang gi thugs kha'i hrīḥ la ... yi ge drug mas bskor ba de las 'od 'phros nas/ phyogs bcu'i bde bar gshegs pa thams cad la sku gsung thugs mnyes pa'i mchod pa phul/ kham gsum gyi sems can thams cad phog pas [492, 1] lus ngag yid gsum gyi sgrub pa sbyangs/ stong gsum gyi 'jig rten gyi kham thams cad thugs rje chen po'i lha tshogs su gyur par sgom mo// de ltar grub pa ma thob tsher ting nge 'dzin gyis gsal btal la bzlas pa bya'o//

### [3] 成就法を終結させること

一区切り<sup>25</sup>の瞑想に留まった後、神を集める。次に、智薩埵が、行者自らより離れて、智薩埵自らの住处へ行く。三摩耶薩埵の輪が自らに溶ける。それは自らの心臓のフリーヒの種子に溶ける。さらに、溶けた滴は法界に徐々に消えるのである。内と外の容器と一切の本質を法界に集めるように、行者は彩色されたマンダラの砂を集める。川の中央に運んで捨てる。自ら三昧の修習を終結させる道へと導くのである。

(thun gyi gzhag las<sup>26</sup> ma tis<sup>27</sup> lha bsdu zhing/ de nas ye shes sems dpa' rang las phyi nas rang bzhin gyi gnas su gshegs/ dam tshig pa'i 'khor lo rnam bdag la thim/ rang thugs kha'i hrīḥ la thim/ de yang rim pas thig le chos kyi dbyings su yal lo// rdul tshon bsdu la/ phyi nang snod bcud thams cad chos kyi dnyings su bsdu la chu bo'i gzhung la bskyal lo// rang nyid rgyun du ting nge 'dzin gyi sgom pa lam du 'khyer ro//)

### [4] 奥付け

以上は大悲者の化身、護法王ソントンツェン・ガンポによって著された大なる成就法なのである。

thugs rje chen po'i sprul pa chos skyong ba'i rgyal po srong btsan sgom pos mdzad pa'i sgrub khog<sup>27</sup> chen mo'o/[492, 4]

## 3 まとめ

上述の『摩尼十万語』の成就法には、インド密教の『サーダナ・マラー』所説の六字観自在の成就法と比べ

<sup>23</sup> [2.9] に述べられた、法身であり法界の本質 [を表す] 般若波羅蜜、禪定波羅蜜 [を表す] 仏眼仏母、精進波羅蜜 [を表す] 普賢母、布施波羅蜜 [を表す] 白衣母、持戒波羅蜜 [を表す] マーマキー、忍辱波羅蜜 [を表す] サマヤ・ターラーという六波羅蜜の母(女神)を指すものとみられる。

<sup>24</sup> stsol が正しい綴りである(Das, 1983, p. 1016)。

<sup>25</sup> 原典テキストにある thun という語は、成就法に要する時間の一区切りを意味すると考えられる。thun は約三時間とされる [Das, 1983: p. 580]。

<sup>26</sup> 意味が不明であるので、訳出していない。

<sup>27</sup> 正しい綴りは、thabs と考えられる。sgrub thabs は「成就法」を意味する (Das, 1983, p. 335)。

て、次のような共通点と相違点がみとめられる。

この成就法のタイトルは、「大悲者の化身、護法王ソンツェン・ガンポによって著された大なる成就法」とあるが、本尊である一面四臂の観自在は、図像学的にバッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』(No. 6)所説の六字観自在と同様である<sup>28</sup>。従って、この成就法は、実質的に六字観自在を本尊として観想するものであり、インド密教における観自在の一種が受容されていると言える。また、上述の部分訳における [1.1] 観想の核の設定等、[1.2] 礼拝・供養・懺悔等、[1.3] 四無量心等の修習は、バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』所説の十数種の観自在の成就法に概ね述べられるとともに、六字観自在の成就法 (Nos. 6, 7) にも見出される<sup>29</sup>。他方、相違点として、インド中期密教の代表的經典の一つ『初会金剛頂経』所説の密教五仏<sup>30</sup> (毘盧遮那 (大日)、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就) 等が、本尊の周囲に観想されること<sup>31</sup>が挙げられる。

以上のごとく、第 2 部第 44 章の部分訳とテキスト・ローマナイズを行うことによって、③マンダラ観想の内容を明らかにするとともに、インド密教における六字観自在の成就法との共通点と相違点を指摘することができた。これらの共通点と相違点は、チベット仏教における観自在信仰の受容と変容の側面を示すものと考えられる。

なお、第 2 部第 44 章の成就法には、①マンダラ図絵の描き方や②マンダラの加持も説かれており、これらを含めた総合的な研究は、今後の課題としたい。

#### 【引用・参考文献】

・一次文献

[日本語文献]

堀内寛仁 (編著) (1983) 『梵漢蔵対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂 (上)』密教文化研究所。

[外国語文献]

Tranyang and Jamyang Samten (Reproduced) (1975), *Ma ñi bka' 'bum: A Collection of Rediscovered Teachings Focusing upon the Tutelary Deity Avalokiteśvara (mahākarunika)*. New Delhi.

Bhattacharyya, Benoytosh (Ed.) (1968a), *Sādhnamālā*. Gaekwad's Oriental Series, no. 26, Baroda: Oriental Institute (Original work: 1925).

Sakuma, Ruriko (Ed.) (2002), *Sādhnamālā: Avalokiteśvara Section, Sanskrit and Tibetan Texts*. Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers.

Vaidya, P. L. (Ed.) (1961) *Mahāyānasūtrasamgraha*, Part 1, Buddhist Sanskrit Texts no. 17 (pp. 258-308), Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

・二次文献

[日本語文献]

石濱裕美子 (2001) 『チベット仏教世界の歴史的研究』ブッキング。

奥山直司 (1989) 「イコンの園へ—パンコル・チョルテン研究序説—」『チベット・曼荼羅の世界』小学館、pp. 131-168.

肥塚隆 (1967) 「瞑想と造形—インド美術における一つの基礎概念—」『南都仏教』20, pp. 60-79.

佐久間留理子 (1993) 『サーダナ・マーラー』におけるジュニャーナサットヴァとサマヤサットヴァ『宮坂宥勝博士古稀記念論文集』(宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会編) 法蔵館、pp. 793-807.

佐久間留理子 (2011) 『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林。

清水乞 (1977) 「インド宗教儀礼と造形—『サーダナ・マーラー』を中心として—」『日本仏教学会年報』43, pp. 59-72.

立川武蔵 (2004) 「マンダラ瞑想法の特質」『印度学仏教学研究』53 (1), pp. 231-236.

立川武蔵 (2015) 『マンダラ観想と密教思想』春秋社。

田中公明 (1990) 『詳解 河口慧海コレクション：チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社。

トゥッチ・ジュセッペ (1984) 『マンダラの理論と実践』(ロルフ・ギーブル訳) 平河出版社。

榎殿伴子 (2021) 『チベット建国神話と観自在信仰—『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章を中心に」—』起心書房。

<sup>28</sup> 上記の注 12 を参照。

<sup>29</sup> [佐久間 2011: p. 225]。

<sup>30</sup> [堀内 1983: pp. 36, 219, 249, 277-278]。

<sup>31</sup> 上述の部分訳における [2.3] 本尊を取り巻く脇侍の観想、を参照。

森雅秀 (2000) 「インドにおける成就法と儀礼」『高野山大学論叢』35, pp. 23-43.

山口瑞鳳 (1988) 『チベット下』東京大学出版会。

[外国語文献]

Bhattacharyya, Benoytosh (1968b) *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

Das, Chandra (1983) *Tibetan-English Dictionary (Compact Edition)*. Kyoto: Rinsen Book Company.

Ehrhard, Franz-Karl (2013) The Royal Print of the *Maṇi Bka' 'Bum*: Its Catalogue and Colophon. In *Nepalica-Tibetica: Festgabe for Christoph Cüppers*, Band 1, Franz-Karl Ehrhard & Petra Maurer (ed.) International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 143-172.

Imaeda, Yoshiro (1979) Note préliminaire sur la formule Oṃ maṇi padme hūṃ dans les manuscrits tibétains de Touen-Houang. In *Contributions aux Études sur Touen-Houang*. Genève-Paris: Libraire Dorz.

Kapstein, Matthew (1992) Remarks on the *Maṇi bKa'-'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet. In *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*. Goodman, Steven D & Ronald M. Davidson (eds.) Albany, NY: SUNY.

Mallmann, Marie-Thérèse (1948) *Introduction à l'étude d'Avalokiteśvara*. Annales du Musée Guimet, Bibliothèque d'Étude-Tome Cinquante-Septième, Paris: Civilisation du Sud.

Schaik, Sam Van (2006) The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in Its Formative Period 900-1400*. pp. 55-72.

Trizin Tsering Rinpoche (Trans.) (2007), *Mani kabum*. vol. II (Enquiries: [manikabum@yahoo.com](mailto:manikabum@yahoo.com)).

Vaidya, P. L. (ed.) (1961) *Mahāyānasūtrasaṃgraha*. Part 1, Buddhist Sanskrit Texts, 17 Dharbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.